
雍門子狄

しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雍門子狄

【Nコード】

N1676P

【作者名】

しのぶ

【あらすじ】

中国戦国時代の人雍門子狄の話

(前書き)

雍門子狄の生い立ちや前半生は私の創作です

戦国時代の中国は多くの国々に分かれている。

雍門ようもん子狄は亡命者だった。

子狄は産まれも育ちも越えつだったが、母は越人ながら父は齊せい人だった。

父が齊人だったために、子供の頃から周囲との衝突が絶えず、子狄はケンカしながら育った。

とはいえ、ケンカばかりではなく、友人も多かったし、成人が近づく
と結婚の話も持ち上がってきた。

当時のことだから自由な恋愛も許されず、両親が縁談を進めていた
のだが、

子狄は隣の家の少女が好きで彼女と結ばれたいと願い、両親にもそ
う頼み込んだが、隣の少女は身分の低い相手だったので両親は渋っ
ていた。

そうしているうちに、父は流行り病で亡くなってしまった。

子狄が父を埋葬して、弔問客を迎えていると、弔問にやってきた母
の兄弟の息子（今まで会ったことも無かったが）が父の国のことで
父を侮辱するような事を言ったので、子狄はカッとなって、持って
いた葬儀用の杖で彼を殴り付けた。

打ち所が悪かったのか、子狄の力が強すぎたためか、その男は死ん
でしまった。

葬儀場は騒然となり、弔問客はバラバラに散っていき、後に残ったのは子狄と母だけだった。

母が言った。

「お前、今に捕手が来るよ。逃げるしかないよ」

子狄「しかし、どこへ？」

母「急いで馬を用意して、斉へ逃げるんだよ。お前の父さんの国へね。」

子狄「分かりました。一緒に行きましょう。」

かくして、子狄は母を連れて斉へ亡命した。

斉には一度も来たことはなかったが、ここが父の祖国なのだと思うと感慨深い。

父の親類を頼ろうと思っていたのだが、彼らは行方も知れなかった。

母を養わなければならぬので、子狄は兵士になった。

時は戦国時代なので、兵士には幾らでも需要がある。

子狄は斉に来てからずっと、越の出身であることや母が越人であることを隠していた。

越にいた頃、父が斉人であったために起こった困難の数々を覚えていたからだ。斉に亡命してきたのも、元はといえばそのためだ。

友人達はどうしているだろうか。あの少女は？着のみ着のまま逃げてきたので彼らがその後どうなったかは全然知らない。親類がどうなったかも知らない。

子狄は強かった。

最初は歩兵だったが、たびたび軍功をあげたのでそのうち將軍の目に留まり、百人将になり、千人将になり、斉王の目に留まって、斉王の近衛兵に選ばれた。

一介の亡命者から王の近衛兵に、非常な栄達である。

子狄は深く恩に感じ、斉王のためなら万死をいとわないと誓った。

やがて母も亡くなり、子狄は独りになった。

子狄は王宮の図書係と親しくなった。

子狄は字が読めないので、図書係に読んでもらって様々な故事を知った。子狄は武勇伝を好み、呉の專諸や、晋の予讓が主君のために命を賭した話を聞いて感嘆したりした。

ある日、子狄は聞いた。「斉で、一番の勇者の話を聞きたいな」

図書係「勇者と言っても色々ありますからな。しかし、最も死を軽んじたという点ではあの“車輪の人”が一番でしょうな」

子狄「どういう人なんだ、それは？」

それはこういう話だった。

昔、当時の斉王が狩りに出かけると、斉王の乗った馬車の左の車輪がギシギシきしんだ。

すると一緒に乗っていた護衛の男が言った。

「私を死なせてください」

斉王「なぜだ？」

護衛「王の耳に、車輪のきしむ不快な音を聞かせてしまったからです。」

斉王「車輪がきしんだのは車輪作りの職人のせいだ。お前が悪いわけではないだろう」

護衛「誰が車輪を作ったかは知りませんが、私が王にそのきしむ音を聞かせてしまった事は確かです」

そう言つて、護衛はついに自らの首をはねて死んだ。

図書係「この人がなぜそこまでしたかは分かりません。記録にはこれだけしか残っていませんから。

ともあれ、死を軽んじた点ではこの人が一番でしょう。」

子狄「そうか・・・」

確かに、理由は不明だ。忠義にしてもやりすぎな気がする。この護衛にも何か意図があったのだろう。

ともあれ、この話は子狄の印象に強く残った。

ある日、ついに恐れていた事が起こった。越軍が斉に攻めてきたのだ。

子狄は窮地に立たされた。

他の国となら、斉王のためにいくらでも戦うつもりがあった。

しかし、母の祖国である越と戦うことだけはできない。

あの友人達も、越軍の兵士の中に混ざっているだろうし、結婚しようとしていたあの少女も、母の親類も、みな越の地にいるのだ。なにより、母を裏切る事になる。

さりとて斉のために戦わなければ、逆に父を裏切る事になるし、斉王の恩に報いることができない。

・・・考えるのにあまり時間はかからなかった。最初から答えは出ているのだ。

思うに、あの車輪の人は車輪作りの職人の友人が何かで、友人をhibaおうとしたのだろう。

子狄は、衣冠を整えてから斉王に謁見して、言った。「私を死なせてください。越軍が攻めて来ましたから。」

斉王「なぜだ。まだ越軍は国境に達してもいないぞ。戦う前から自殺するとは、それが臣下の礼なのか？」

子狄「王は、あの車輪の人の話をご存知ですか？あの車輪がきしんで自殺した護衛の話です」

斉王「その話なら、聞いた事がある」

子狄「今、越軍の音が耳に不快なのは車輪がきしむ音の比ではないでしょう。

車輪のためにさえ死ぬのなら、今私が死んでも悪くはないはずです」

そう言う子狄は斉王が止めるのも聞かず退出した。

子狄は斉の宗廟の前まで来ると、剣を抜いた。今まで幾人も人間をこの剣で斬ってきたが、最後に斬るのは自分自身になるのだ。そういうえば、こんなことわざがあった。

「天の下す災いはまだ避ける事もできるが、自分の引き起こした災いは避ける事ができない」

しかし、どこからが自分の引き起こした事だったのか。兵士になったからか。あの親類の男をカツとなって殴ったからか。たまたま自分に腕力があったからか。父が斉人で、母が越人だから？
いや、もうどうでもいい。いずれにせよ、これで最後だ。

子狄は宗廟の前で自分の首をはねて死んだ。

斉には越の間者が入っていた。

越の間者が子狄の事を報告すると、越軍の將軍は軍を七十里後退させ、ついには斉と戦うことなく越に帰った。

「もし斉王に従う者がみな雍門子狄のようであつたら、逆に越のほうが減ばされかねない」
と思ったからであった。

かくして、子狄は自分以外は誰の血も流すことなく、越軍を退けたのだった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1676p/>

雍門子狄

2010年11月27日15時38分発行